

精密総合健診(人間ドック)

動 向

平成19年度の人間ドック受診者数は、昨年度より336名増の11,188名(男性6,522名、女性4,666名)で、微増傾向が続いている。

当会人間ドックは、平成19年度よりシステムを更新するとともに、個々の受診者の経年データや様々な背景を考慮して個人ごとにきめ細かなサービスを提供できるよう、専任のコーディネーターを置いた。また、睡眠時無呼吸症候群の検査などオプション項目の充実、ドック受診後のフォローメニューとしての生活習慣改善プログラムの新設、施設の改修などを行った。平成20年4月から始まる「特定健診・特定保健指導」への対応については、人間ドック受診当日に検査結果の説明とそれに基づく保健指導が実施できるよう準備を進めた。

これまで、個々の受診者のニーズに適応した健診内容を、高い精度で、快適な受診環境で提供することを目指して取り組んできたが、平成20年2月に人間ドック健診施設機能評価認定を取得することができた。受診者の方々により快適に安心して受診していただけるようさらに努めたい。

方法と結果

年度別受診状況をみると、平成19年度は男女とも受診者数の微増傾向がみられ、全体で336名の増加があった(表1)。

受診前歴では、男女とも6年以上連続受診が最多であり、健診の有用性を向上させる上では、受診継続率を上げることは重要である(表2)。

総合判定区分内訳をみると、「異常なし」、「心配なし」を合わせても男性0.8%、女性3.2%である。「要観察」は男性8.2%、女性19.8%と例年と変化は見られない(表3)。

がんの新規発見を臓器別にみると、肺がんは平成10年にヘリカルCTが導入されて以降、平成17年度が9名と過去最高だったが、平成18年度は0名となった。逆に平成18年度はPSAからのがん発見のなかった前立腺がんは8名発見された。全体として新規のがん発見は受診者の0.18%で例年どおりであるが、個人情報保護の壁により集計が困難な場合もあるため、年度によるばらつきはある程度やむを得ない。特に大腸がんに関しては、便潜血陽性者のフォローが不十分で次回ドック受診時まで把握できないケースが相当数あると思われる(表4)。健診後、他医を受診するケースの追跡調査をさらに徹底するとともに、精検受診率をあげるよう、フォロー体制を強化させていきたい。PSAによる前立腺がん検診の実施数は平成18年度とほぼ同等で、男性受

診者6522名中1533名(23.5%)が受診した。特に50歳代から70歳代の30%以上が受診し、前立腺がんのスクリーニング検査としての認知度が高まったと考えられる(表5)。

主な異常所見をみると(表6、10)、肥満に関しては、平成19年度からは腹囲を含めた判定がなされるようになり、有所見者数が増えることが予想されたが、肥満者の比率は平成18年度より減少した。メタボリック症候群および腹囲への関心が高まった可能性については、今後の動向を観察する必要がある。血液学的検査では、白血球数は男性がやや多く男性では加齢とともに減少傾向がみられる。これは白血球数が喫煙の影響を受け、若年者に喫煙率が高いためと考えられる。赤血球数、ヘモグロビン、ヘマトクリットは男性で加齢とともに減っていくが、女性では50歳代で反転増加する。脂質代謝異常は男性50.5%、女性35.2%と非常に高く、男性は40・50歳代の中性脂肪が高く、女性は50歳代以降LDLコレステロールが増加する。男性では飲酒、女性ではホルモン変化が関与していると考えられる。糖代謝異常については、男女とも加齢とともに増加傾向があり、有所見率は男性が女性の2倍以上である。血圧に関しては年齢とともに上昇し、各年代で男性が高い傾向にあるが、女性の場合閉経期以後血圧の上昇が大きいため、加齢とともに男女差は小さくなる。また、診療時の血圧よりも家庭血圧(早朝・就寝前血圧)や夜間血圧のレベルが脳心血管事故に重要な因子とされている。健診時に家庭血圧の測定の重要性を啓蒙する必要があると思われる。肝機能障害は男性に多く、若年ほどASTよりALTが高く(女性は逆)、 γ -GTPは2倍程度高い。特に40・50歳代の男性で γ -GTPが高く、アルコールの影響のみならず内臓脂肪型肥満に伴う脂肪肝が多いためと考えられる。働き盛りの生活習慣の問題が浮き彫りにされている。

胸部X線・CT異常は昨年と同じ傾向であり、レントゲン上の心拡大の頻度も変化がない(表7)。安静時心電図所見の内訳は例年と同様である。腹部超音波所見(表9)、胃部X線所見にも特に変化はない。

平成20年4月より「高齢者の医療費の確保に関する法律」に基づき「特定健診・特定保健指導」が開始され、これまで以上にメタボリックシンドロームへの注目が高まると予想される。一方、人間ドックの両輪の一つであるがん検診についても効果を上げるべく、検診実施率、精検受診率の向上に尽力していく必要がある。

関係の集計表は116頁に掲載